

部屋をかたづける

石飛 和彦

部屋をかたづけようと思う。

部屋をかたづけることは、科学的探究のテーマになるだろうか？ なる、というのがエスノメソドロジーからの回答である。あらゆる日常的活動には秩序があり、それを解明するためにオルタナティブな社会学的探究を実践しよう、というのが、エスノメソドロジーの提案である。部屋をかたづけながら、もう少し展開してみよう。

1：科学的探究とは何か — ひとつめの探究

部屋をかたづけながら？ — ここでまず疑問。科学的探究は、当該の活動（部屋のかたづけ）から切り離されていないといけないのではないか？ すなわち、かたづけを観察した「後に」分析や考察が始まるのではないか？ あるいは、科学的探究の目的が、何かに役立つ「知見」を提供することなのだとなれば、科学の成果（＝分析や考察によって見出された「一般的法則」）を役立てようとする私たちの日常的活動の「前に」科学的探究は位置づけられることになるともいえるのではないか？ まとめよう。私たちの知っている「科学的探究」は、当該の活動から切り離され、当該の活動が行われた後に、そこから「一般的法則」を見出すことを意味していて、その「一般的法則」がその後の（別の、しかし同じ）当該の活動に当てはまり役立つことが科学の存在意義である、ということになっている。ここに二度登場する「当該の活動」は、別のものであり同じものである。「一般」ということばが両者をつないでいる。観察の対象となる活動（A）とその成果を役立てる活動（B）の両者は、「一般」に対する「個別具体」として、別のものであり同じものであることになる（よりくわしく言えば、観察の対象となる活動（A）は、それじたい

A1、A2、・・・と複数でありうる（たくさんの個別具体例から一般性を抽出する）し、また、その成果を還元する活動（B）のほうも、複数になりうる（いつでもどこでもあてはまる「知見」である）。それらすべての個別具体的活動が、「一般」ということばのもとに同一化されている）。

私たちの知っている科学は、具体から一般を抽出する。そして、多くの場合（よく学生が言うように）ひとつの具体的事例だけを見ては一般的なことが言えない。ひとつひとつの具体的事例は、ノイズだらけで一般的法則を不完全にしか体现していない。だから一般的法則は、具体的事例を科学的に分析するという手続き（例えば、大量のアンケートを配って統計的に分析する、等々）によって形式的に見出されることになる。

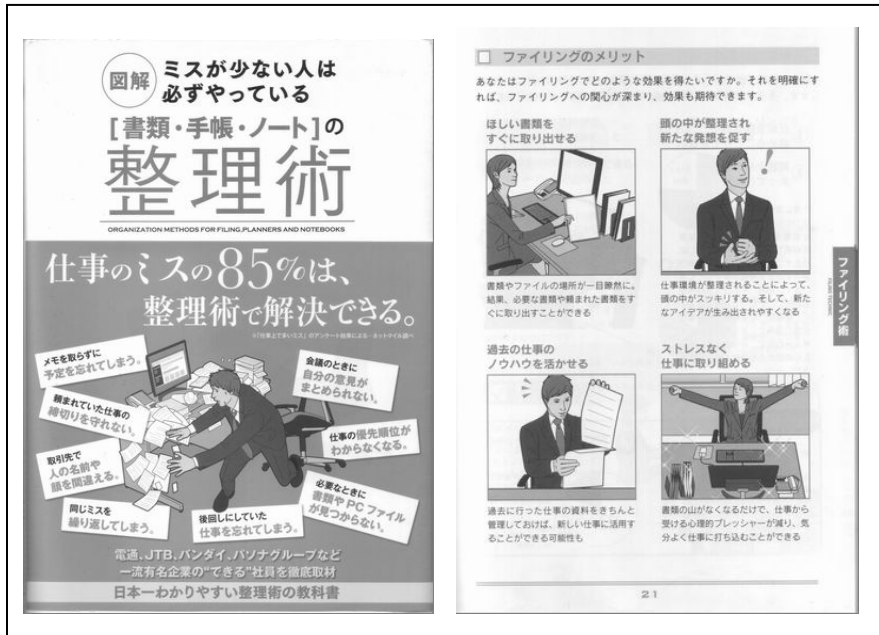
もちろん、つけくわえるならば、こうした「個別具体から一般抽象」を見出す能力というのは、人間理性の重要な働きだとも言われている。つまり、人間誰もなにがしか合理的に日常生活を送っているわけで、ただそれをはるかに高度化した延長線上にある極度に形式化されたものが科学なのだ。 — と、ここまでが、私たちの知っている「科学」のありようである。

部屋のかたづけに戻ろう。

世間には「整理術」の本がたくさんある（書店に行けば「整理術」という専門の棚があるほどだ）。それらの本には、整理ということについてあれこれ研究し得られたであろう「知見」が書かれている。いわば「整理の科学」である。それにくらべて私たちの部屋はかたづいていない。多少の努力はしていても、不完全なものにすぎない。だからこそ、私たちは「整理術」の本を買い、科学の成果たる知見を参照し、自分の部屋にそれを当てはめて、よりきちんとした部屋の片付けをしようとするわけである。

2：ふたつの秩序

整理術の本には、しばしば、次のような対比的な挿絵が示されている（サンクチュアリ出版(2001)）。



(図1)

(図2)

絵の意味は一目瞭然である。(図1)が整理する前の状態、(図2)が整理した後の状態、ビフォーアフター、というわけである。前者は無秩序であり混乱しているが、後者は秩序的である。その「秩序」の由来は、合理的・形式的ないし科学的な整理術を導入したことによる、ということになる。

モノや資料を分類し、規格化し、ラベルを貼り付け、階層化し、ファイリングする。用途別・プロジェクト別・問題別・時系列・・・といった合理的システムに従ってルールを決め、ルールに従ったインデックスをラベルに書き込むことで、資料を合理的なシステムに紐付ける。一方、同じそのシステムに対応するように、ファイルボックスや棚や机の引き出しやデスク上の場所を決める。ルールに従ってモノや資料を所定の場所に収納していけば、すべてが合理的システムの下に管理されることになる。混乱状態に秩序をもたらす

のは合理的システムであり、それにもとづいたルールであり、そのルールに従った私たちの日々の活動、日常をできるだけ合理的・科学的に送っていこうとする私たちの忠実なる努力、である、ということになる。



(図3)

(図4)

(図3) (図4) は、共同研究室の周密書架。本にはすべてラベルが貼られ、図書記号が振られている。その図書記号の数字順に、本が並べられる。この書架の秩序は図書記号の合理的な体系によってもたらされ、その体系に従うというルールに私たちが従うことによって守られている。私たちがそのルールを守らないとき — 本を順番どおりのところに戻さなければ — その本はたちまち行方不明になってしまう、つまり混沌の中に呑みこまれていってしまう。

さてしかし、そういった「秩序」観、「合理性」観、「科学」観は、ある決定的なひとつの事柄を、必然的に、見落とすことになる。すなわち、そういった科学、そういった秩序観の目からは、私たちの具体的な日常的活動それじたいの中には秩序がない、ということになる。あるいはあってもせいぜい、一般的合理的なシステムが有している秩序の、影のようなもの、不完全なもの、に過ぎない、ということになる。科学者・エキスパートに近づこうとしてもあくまでも不完全な素人の努力、あるいは、抽象的合理性に比して不完全な具体的な努力、理想に追いつけない努力の欠如によるものに過ぎない、というわけある。ということは、論理的には、具体性それじたいの中には、もともと、無秩序な混沌しかない、ということになる — そしてしかし、それは本当だろうか？ 本当に具体性それじ

たいの中に秩序はないのだろうか？ — それは違う、と、エスノメソドロジーは主張する。

確かに、形式的一般的法則を発見する科学、規則（ルール）に従った行為、それによってもたらされる秩序、というものは現に存在するだろうし、現実的にそうしたものの見方、やりかたは、生産性をあげているだろう。十進図書分類法は現に世界中で採用されているし実際にそれで本棚も片付く。それはその通りだ。エスノメソドロジーの始祖ガーフィンケルは、社会学の領域でそれを強力に推し進めたのが（彼の師でもありアメリカ理論社会学の巨人でもある）タルコット・パーソンズである、として、そうしたやりかたを、パーソンズによって先導された「全世界的な社会科学運動」と呼んでいる。それは現に存在しているし、機能しているし、私たちにとって当たり前なものの見方、やりかた、になっている。しかしそれにもかかわらず、「もうひとつのやりかた」がある — それが、エスノメソドロジーなのだ。

エスノメソドロジーは、具体の中に固有の秩序がある、それを（アスタリスク付きの）「秩序*」と呼ぼう、と提案する。エスノメソドロジーとは、この秩序* を探究する、「もうひとつの（オルタナティブな）」科学的探究である。

「巢穴的空間」の秩序* — もうひとつの探求

部屋に戻ろう。そしてなにより、日常に戻って考え直してみよう。

たしかにこの部屋はちらかっているように見える。しかし、こんな経験はないだろうか？ — 他人からは、客観的には、一見、ちらかっているように見えても、本人にとっては「何がどこにあるのかわかる」。そのとき、その部屋はその主にとっての「巢穴」のような空間になっている。もし、「一般的形式的」なやりかたでその部屋を整理してしまうと、その部屋の主にとっての「巢穴的秩序」は破壊されてしまい、むしろ「何がどこに行ったのかわからなくなる」。

このような秩序は、一般的・客観的・形式的に外から与えられた「秩序」とは異なるものである。たんに違うというのではなく、成立する仕組みそのものが異なっている。部屋の主にとっての「巢穴的秩序」、具体性それじたいの中にある、具体性の内側から見出された秩序、これが、エスノメソドロジーが見出そうとする、オルタナティブな秩序* であり、この秩序* を解明する「オルタナティブな探究」がエスノメソドロジー、というわけである。

私たちがふつうに知っている科学は、定義上、個別具体の中にある秩序* の成立する具体的仕組みを、消去することで「一般的法則」の空間を開く（それぞれの個別具体は、「一般」ということばのもとに、「異なるけれど同じ」ものとしてあらかじめ自己同一性を与件として与えられている）。それによって可能になることがあるのを認めるにやぶさかでないにせよ、しかし、そこで見えなくなっているもの、しかし具体的現実として現におこっているもの、としての秩序* の成立を見ることでしかわからないことがあるのではない。それが、エスノメソドロジーの主張なのだ。

確認のために若干の迂回をして補助線を引いておこう。

「巢穴的秩序」というと、生物学者ユクスキュルの言う「環境世界」が想起されるかもしれないし、あるいは、心理学（ないし心理療法のひとつであるゲシュタルト療法）で言う「ゲシュタルト」ないし「身体図式」が想起されるかもしれない。しかし、ここで仮に「巢穴的秩序」と呼んでいるものは、その両者とは（恐らく）ことなるものである。

第一に、それは、ユクスキュルの想定するような、生物学的種に固有の、本能によって規定されたものではない。それはたかだかその部屋の主のものである。

第二に、それは、心理学の言うような意味での「ゲシュタルト」ではない。少なくとも、主観的心理的空間、よりありていに言って「脳みその中」に形成される「認知地図」のようなものを意味するのであれば、その限りにおいては、別物である。例えば、乱雑に積み上げられた本の山から目当ての本をすぐに取り出すことを考えてみよう。当たり前の話であるが、目をつぶって「脳内情報」だけを頼りにしてはそんなことはできない。そのいみ

で、ここでいう「巢穴的空間」は、脳の中に広がる主観的心理的空間ではない。また例えば、その部屋に複数の利用者がいる場合を考えてみよう。複数の利用者がその空間を共有している場合でも同じことが同様に成り立ちうる。つまり、「巢穴的空間」は、間主観的・間身体的に広がっているものだと見える。

後者の想定例を敷衍しよう。部屋の主が自分ひとりである場合でも、「過去の自分／未来の自分」によってその部屋が用いられることをかんがえれば、複数の利用者という捉え方ができる。ある時間の幅があり、過去の自分（A）がいて、また未来の自分（B）がいる。現在の「巢穴的空間」は、過去の自分（A）によって残されたものでもあり、また、未来の自分（B）に残していくことになるものでもある。この場合、過去の自分（A）と未来の自分（B）は、同一人物であっても互いに「他者」的な存在である。「他者」的な存在でありながら、同じ場を（そしておそらく同じ身体を、ということにもなるが）共有することによって、ある時間の幅をもって協働的な活動を行っている、というわけである。すると、ひとことでまとめればこういうことができる — 「巢穴の秩序」とは、日常的な活動でその場を共有し協働する人びとの、相互行為的・社会的な空間の秩序のことである。

この空間には、そこで行われている社会的活動が沈殿している。この空間内で社会的活動が行われるにあたっては、その活動の中でこの「秩序*」がつねに見出され（産出され）、利用され、そして再び沈殿していく。沈殿、というのは、物理的次元においても、相互行為的次元においても、ということである。「巢穴的空間」には、そこで行われていた／いる活動の痕跡が、物理的な形でも残されているし、またそれだけではない、いわば「状況のコンテキスト」として、相互行為的次元においても、積み上げられ残される。「巢穴の秩序」とは、それらの物理的社会的次元にまたがるハイブリッドな形成物なのである。したがって、この空間について解明するためには、この場で行われている社会的活動について観察する必要がある、ということだ。

事例

ともあれ、部屋に戻ろう。



(図5)

さしあたりこれがいま私の見ている「巣穴」、研究室である。特にかたづいているわけでもないが大混乱ということもないと思う。大学教員の研究室というのはこの程度のものではないだろうか。ドアから入った見ただけで言えばいちばん奥の窓向きにデスク、右側の壁はずっと本棚、左側は奥に本棚、壁に沿ってスチール棚、ホワイトボード、それからもうひとつ本棚、中央にテーブルとソファセット。手前の入口際、写真に写っていないところにゴミとか資料がごたごたと積みかさなっている。

ここで日常的にする活動は、事務的な仕事をしたり資料を作成したりすること、学生(5、6名でいど)とゼミをやること、あとは本や資料を置いておくところという役割が大きい(勉強や研究や論文執筆はほとんどやらない。自宅でやるので)。日常的活動がこのようなものだということは、この空間における「整理」「秩序」ということの意味に影響を及ぼす。たとえば、書類作成のための資料が必要に応じてすぐに出てくることには意味があるが、その資料が存在する場所がこの空間内のどこであるのか、どの棚の何番目のどのファイルの何番目のドキュメントか、等々、が「一義的に確定すること」にはさほどの意味

はない。ゼミ中に参考になりそうな本があれば、学生の座っているソファの後ろの本棚を指差して「そのへんになんとかかんとかって本ない？あったでしょう？」と言うことはあるが、図書館の書架のように匿名一般の利用者のために端から端まで順番に本を配列しておくことには意味がない（し、言うまでもなく不便だ）。

さて、もう一度繰り返そう。私たちが知っている秩序とは、合理的体系によって外側からもたらされるようなものだった。体系化の及ぶ範囲に体系によって形づくられた合理的・形式的な秩序があり、体系化の終わるところから先には混沌しかない。最も具体的な次元には秩序が存在しない、とされていた。そしてしかし、エスノメソドロジーは、その具体の中に秩序*を見出そうとするのだ、と既に述べた。この研究室の有様について考えるとき、資料の場所が確定していなかったり本が順番に並んでいなかったりすることを、秩序の不足、あるいは秩序が不要なのだ、と理解しないでおこう。匿名的一般の利用者の使用に向けてデザインされた図書館の書架の本は、体系的な図書分類記号順に並べてあるが、研究室の本は私と学生しか使わない。そのことを、「利用者・目的が限られているので、より少ない秩序でかまわない」とは理解しないでおこう（そういう面はたぶんにあるにせよ）。ここで問題にしたいのは、形式的体系化が行われていない場において、混沌でなく「秩序*」が存在し、その「秩序*」は、「より少ない秩序」ではなく端的に「別の秩序*」であり、その「秩序*」のうえに私たちの巣穴的な、familiarな、日常が営まれている、その仕組みに注目することである。

具体における、具体からなる秩序*

たとえば、デスクの引き出しをあけるとこんなかんじである。これはあまり整理されているようには見えない。



(図6)

引き出しからボールペンを取り出す。日常的におこなっているそうしたことには、不自由も不安も混乱もなくごく自然におこなわれている。このあたりまえの自然さがあるという事は、すなわち、そこに「秩序*」がある、ということである。ではその「秩序*」はどのように成立しているのか。



(図7)

なんのことはない。引き出しを開けた私は、そこに手を突っ込んでガシャガシャとやって目指すボールペンを拾い上げる。あたりまえのことながら、そこで求められる秩序は、

一般的・客観的に、状況の外側から観察して見られる秩序である必要はない。状況の内側に手を突っ込んで、状況に働きかけることによって、秩序が見出される。当然のことながら、私は混沌の中に手を突っ込んでいるわけではない（混沌の中に手を突っ込めといわれたら私は不安や恐怖を覚え混乱するだろう）。このとき、この引き出しは、ある familiar な「深さ」をもつ空間として経験される。この「深さ」は、たんに客観的な数値として計測可能であるようなものではない。客観的に測定される三次元の空間は、それじたいとしては無内容の容積でしかない。しかし私がボールペンを求めて手を突っ込んでいるこの引き出しには、「巢穴的空間」が、秩序* をもって成立しているのである。では、それほどのようなものから成り立っているのか。

もちろん、たしかに、この空間の構成要素として、この引き出し空間の物理的な諸特性があることをまず確認しなくてはならない。しかし、それは単純に客観的なものではない。たとえば、客観的な数値としての容積ではなく、それは、ボールペンを探す私の手と目にとっての（また、ボールペンが見え隠れするための）「狭さ／広さ／浅さ／深さ／等々」として、言い換えれば生態心理学で言う「アフォーダンス」として、立ち現れる。たとえば、文具を入れているこの引き出しの高さが10センチ程度であるという物理的特性は、適当にガシャガシャとやればボールペンがすぐに見つかるという意味での秩序* の根拠のひとつとなっている（あたりまえのはなし、同じデスクにある別の引き出しは40センチほどの高さで、これは私のやり方では文具入れに好都合なアフォーダンスを提供しない）。私の手と目は、引き出しの内寸の狭さや浅さ、ボールペンや他のモノたちの形や重さや色や大きさやすべりやすさ転がりやすさ等々、を資源として、そこをガシャガシャとやって、内側から働きかけ、それらとの相互作用を行うことで、めざすボールペンを見出す。ごく「あたりまえ」（taken-for-granted）で、「見られてはいるが気づかれてはいない」（seen-but-unnoticed）なことであるが、私の見出すこの秩序* は、具体的なモノの具体的な・物質的なアフォーダンスを資源としてそれに依存している。これが第一の構成要素である。

また、もうひとつの構成要素として、やはり「ルール」に注目する必要がある。写真を

見てわかるように（また多くのデスクの引き出しがたぶんそうなっているように）、この引き出しの手前側には筆記具を置くためのトレイがあり、そこには、「ペンはトレイに」というルールがあるのだ。写真を見てぜひご理解いただきたいのだが、この規則は私においてもできるだけ遵守されている。そのため、この引き出しに秩序を与えているのはやはり形式的ルールなのだ、と言いたくなるかもしれない。しかし、そうではないのだ。この引き出しをめぐる私の活動は、ルールに支配されて（rule-governed）いるというよりは、やはりルールをひとつの資源、リソースとしているのである。そのルールは、他のもろもろのリソース（先に指摘した物理的なアフォーダンスだけでなく、この引き出し、このボールペン、そこに手を突っ込んで探している私自身、あるいは仮に学生に使わせることがある場合には彼らの活動、等々に関するもろもろの知識ストックや記憶なども含む、さまざまなリソース）と組み合わせられ、状況を解釈する枠組みとして用いられる。ペンや細長い筆記具は、たしかに漠然と所定の位置に、トレイの上に、ある。しかし、ないこともある。トレイの上からあふれ出して引き出しの中にずり落ちていることも多い。ボールペンが軽くて滑りやすいためかもしれないし、私が引き出しを開け閉めするやり方が乱暴だからそうなりやすいのかもしれないし、とくに昨日ホッチキスを探してガシャガシャと引っかきまわしすぎたせいかもしれない。ペンは容易にトレイの上からずり落ちる。しかし、それによってペンが、秩序の「外」、混沌の中に消失してしまうわけではない。トレイになれば「トレイの上にあったけれどずり落ちた」可能性を探ってその付近がガシャガシャと探索される。「ペンがトレイに」というルールは、ガシャガシャとかき混ぜる探索活動の中で常にそのつどコンテキストの中に投げ込まれ、探索のリソースとして用いられるのだ。そして、目指すボールペンが出てきたときも、「混沌の中から偶然に発見された」のではなく、あるべき場所から手にとられたものとして平然と出てくる。その「あたりまえさ」「自然さ」こそは、ルールが用いられコンテキスト（たとえば「トレイにあったペンが引き出しの開け閉めのはずみでずり落ち、さらにガシャガシャやりすぎて奥のほうにもぐりこんでいったので、奥のほうから出てきた」といったごく自然らしいストーリー）が構成されることによって成立するものなのである（仮にもし、絶対に入れたはずのペン

がいくら探しても出てこないばあい、そのときこそ不条理と混沌と不安と恐怖を感じるかもしれない。しかしそのばあいでも実際には「きっと学生が戻し忘れたのだろう」といったやりかたで容易に新たなコンテキストがいくらでもポストホックに構成されるだろう。ガーフィングルの一連の「期待破棄実験」を参照のこと）。

秩序* の組織化

そのようにして、私は私の「巢穴的秩序*」を内側から組織化する。こんどは本棚を見てみよう。



(図8)

先に参照した、図書館式の書架の本の並びとは大変なちがいである。たしかに、この写真に映っている棚には、「家族論」に類する本が並んでおり、そのかぎりでは、図書館式に形式的ルールがある程度守られているようにも見える。しかし、本そのものの並び方は適当で、また、本棚の使い方としてはもっともやってはいけない、「本の前に本を置く」「本を横積みにする」ということをやってしまっている。これもやはり、形式的・合理的ルールが部分的にしか守られていない、秩序の不足を表わす写真のように見えなくもない。しかし、ここにもやはり巢穴的な秩序があるのだ。

この、本の列の前に横積みになされた数冊の本は、じつは、家族論の授業のときに使った、持って行った本なのである。特に、積み重ねてある4冊のうち上の3冊は、毎度のようによく持っていく。つまり、授業のときに持っていった本を、授業から帰ってきてまとめてポンと置いた、ということだ。不精っらしいはなしではあるが、まあ、よくやることではあろう。おそらく次の授業のときにまたまとめて持っていくので、いちいち本の列の中にバラバラに戻すよりも楽だ、ということもあるのだろう。もちろん、そんなことをするというのは、形式的・合理的ルールからの逸脱である。しかし、ここで重要なのは、この逸脱が、混沌を産み出してしまうのではなく、むしろ利用されている、という点なのだ。つまり、形式的なルールとの差異によって、手前に積んである本が、より見えやすく可視化されているのである。同じようなことは他にもある。別の棚で横積みになっているのは、新しく買った本である。新しく買ったので、従来の本の列の間に入れていくのがめんどくさい、というのがひとつの理由ではある。しかし同時に、新しく買って興味も新鮮なので時間ができしだい読みたい、という本を目に見えやすく可視化することにもなっているのだ。新しく買った本でも、当分読まなそうな本はしかるべき棚に並べてしまうこともあり、その意味では、棚の手前に横積みにはすることは、新着本の中でも特に読みたい、という意味を表わすことにもなっているのである。このようなやりかたで、巢穴的な本棚においては、形式的ルールは秩序*の形成のリソースのひとつとして用いられ、むしろそれとの差異によってさまざまに多彩な実践的な意味が作り出されることになる。そして、そのばあい、むしろ形式的ルールがそのまま支配しているような、要するに棚に順序良く並んでいる書列は、本棚と本をめぐる活動のコンテキストの中ではいわば図に対する地の役割を与えられることになり、いわば最も可視化されない、比喩的に言えば「仮死状態の本」として立ち現れるということにもなるのである。

巢穴的な部屋における整理の可能性

私たちが日常的な活動にともなって、そのつどの「意味」を生成し環境のそこかしこに埋め込んでいくこと、それによって空間を巢穴的な、生きられた空間に生成していくこと

— もちろん、そのような活動が積み重なっていくうちに、巢穴もなにも、收拾がつかなくなることもありうる（私たちの知っている科学は、一般的な視点に立って、この状態を、情報量すなわちエントロピーが増大して「熱的な死」に向かうものと記述するかもしれない）。塗り重ねすぎた油絵のように、いつのまにか收拾のつかなくなった巢穴空間の息苦しさ、うっとうしさ、というのはあるだろう。そんなときに、「整理術」の本にある通りに、「整理が心をスッキリさせる」ということは大いにありうるだろう。にもかかわらず、私たちの日常的活動をなにほどこか生氣あるものとしているのはやはり、このようなやりかたで巢穴的な空間の秩序* を組織化するこのような活動、モノとルールと私たち自身の過去と未来とをコンテキストの中に織り込み織り上げていくこのような営みなのである。

そうであるならば、本稿が「整理」についてなにごとかを示唆するとするなら、それはつぎのようなことになるだろう。すなわち、体系化を外側からおしつけるようなやり方ではなく、しかも、巢穴的な活動の自己組織化がバランスを失い收拾つかなくなってしまうことを防ぐような、具体的なやり方、手順、プロトコル、ストラテジー、方針、あるいは具体的な道具、ツール、デザイン、インターフェース、等々を、利用可能なリソースとして見つけることが重要だ、ということになるだろう。

それが具体的にどのようなものになるのか、は、実際の日常的活動の巢穴的な組織化を行いながら、かたづけを試行錯誤しながら、そしてそれを内側から具体的に見ていくことの中から、手がかりを見出していくことになるだろう。そこで見出されるものは、ある具体的な状況において「固有な適切性」（unique adequacy）を有するもののはずである。そしてしかしそれが、そのことによって同時に、別の具体的な状況の中に、リソースとして投げ込まれ機能する可能性を持つことになる。そうした、具体的なものにこそ可能なコンテキスト横断的なやり方で、形式的体系から合理的に演繹的に作り上げられる「秩序」とは異なる「秩序*」を組織化する手がかりが見出されるのである。

本稿で紹介したエスノメソドロロジー研究は、一方では厳密な科学論の次元でのアカデミ

ックな議論にもとづいており、そこから、ともすれば現実離れた言葉遊びであるかのよう
に見えもする。しかしもう一方では、エスノメソドロジーはきわめて実用的な側面を持
ち、現にそのように展開している（この点については拙稿(2010)で部分的に触れた）。ご
くふつうのありふれた私たちの日常的な活動の秩序* の組織化の仕組みを解明すること
で、その具体的なカイゼンにむけての示唆を産出する研究はすでに広く行われているのだ。
本稿は、「部屋をかたづけること」という、私たちにとってまったく身近なありふれたこ
とがらについてとりあげた。あらゆる日常的な活動が科学的探究のテーマになるわけで、
部屋をかたづけることももちろんそうなのだから、私はそろそろまた部屋のかたづけに戻
ろうと思う。

【 文献 】

Garfinkel,H(2002) Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism , Rowman &
Littlefield.

Garfinkel,H.(2007) "Four Relations between Literatures of the Social Scientific Movement and
Their Specific Ethnomethodological Alternatives." In Orders of Ordinary Action: Respecifying
Sociological Knowledge, edited by Stephen Hester and David Francis, 13-29. Burlington, VT:
Ashgate Publishing.

石飛和彦(2010)「子ども「問題行動」のエスノグラフィー」、武内清（編）『子どもの「問
題」行動』（子ども社会シリーズ5）学文社、pp.94-107

サンクチュアリ出版（監修）(2010)『図解 ミスが少ない人は必ずやっている「書類・手帳
・ノート」の整理術』サンクチュアリパブリッシング